The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「もののあはれ知る」ということ
Author(s)	犬塚, 旦
Citation	語文. 1959, 22, p. 17-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68534
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「もののあはれ知る」ということ

犬塚　旦

一

成立論に関する「源氏物語の最初の形態」以下、数々の劃期的力作を世に問われた武田宗俊氏によって「所謂『もののあわれ』に就いて」[1]なる論文が発表せられたことは注目すべき事柄といわねばならない。氏にしたがえば、平安時代には、「もののあはれ」は「知る」という語と結びつくものと、「知る」という語に結びつかないものとの二つの用法があって、前者は人情を解し同情共感することを意味し、後者は感傷を含んだ特殊な情趣情調をさす。宣長がとりあげたのは前者のみであり、後者には関係はない。よろしく、宣長の本意を汲み、さらにさかのぼって平安時代初期の意義に立ちもどってこれを承けつぐべきだとされるのである。この注目すべき大胆なる問題提起に対して、これをめぐる論の意外に少いことは遺憾なことといわねばならない。わずかに今井源衛・井手恒雄・大久保正・小松茂人等の諸氏による論があらわれているにすぎない。今井氏のは「この論も資料用例の解釈の上でまだ疑点を残しているように思われる」との疑問を述べられている程度であり、[2]大久保氏は宣長のもののあわれ論について考察せられ、[3]宣長の説く「もののあはれを知る」は、武田氏の言われるように「人生に対する態度であって、情趣情調等に対する美的態度ではない」とは決して言われないようであるとし、宣長が「もののあはれを知る」ことを主張する時、情趣や情調を解する美的態度が重要な側面として含まれていたことは否定できないと思うとされる。この点に関しては小松茂人氏も、宣長の「物のあはれ」について検討せられ、[4]宣長が花紅葉の折節の情趣につき、「風流の物の哀」（紫文要領）というような言葉を用いてもおり、「物のあはれしる」を「物のあはれ」とは違った観念を表わすものと考え、そこには自然の情趣を哀れと感ずる意味はなかったとする説を非とし、これは恐らく宣長の真意を汲むものではあるまいとしておられる。而もこうした宣長の用法は平安時代に用いられた「もののあはれを知る」の用法を逸脱したものでないことを、大久保氏は武田氏のあげられた用例中、源氏物語の帚木、夕霧の例や大和物語、土佐日記における例などについて指摘され、これらは情趣性をおび、情趣を解する美的な態度を含むものとして解しうるのではないかとし、美的概念としての「もののあはれ」の本質解明という方向にかたよっていた観のあった近時学界の趨勢に対する問題提起としての武田氏の論の意義は高く評価されつつも、知

ると結びついた用法と然らざるものとを、武田氏の説かれるごとく截然と区別し得るかどうかにはつよい疑問を抱かれているのである。これらに対し、井手氏は武田氏の提唱を全面的に支持されている。[5] しかし、はたして井手氏の態度は正しといえるであろうか。支持せられる以上は、大久氏の提示せられたような疑問点をことごとくはるけ、つくすべきてつづきがみたされた上でなされるべきではなかったか。武田氏の論から出発せられる前に、その論の妥当性をきびしく検討批判してかかられる慎重さがのぞまれるのである。武田氏の論についてはわたくしもかってその批判を別にのべたことも[6]あるが、とにかく氏の論にはまだまだ問題がのこっている。ここではそれらのうちの一つ、「もののあはれ」の語の解釈の問題をとりあげ、これを中心にしばらく考察してみたいと思う。

二

「もののあはれ」の語について高木市之助博士は「もののあはれ」とは「もの」を対象とし「もの」に規定された文字通りに「もの」の「あはれ」であってそこにははっきり「あはれ」と同義語でない「もののあはれ」の表現的意味構造が考えられなければならぬといわれている。[7] たしかに、「もの」への顧慮が今後大いにはらわれていくことで、「もののあはれ」は一層その内容をくわしくされ、これを文芸論的に展開せしめる可能性を増大するであろうし、日本文学をみる一つの新しい方向もひらけてくるであろうと思われる。「もの」については、さきに和辻博士の哲学的意味づけが見られるが、[8] 近くは西下経一博士によって源氏物語の「もの」がとりあげられ、[9] 「もの」の意味を十九種にわけて細説せられたし、高森亜美氏もくわしい考察を行っておられる。[10] 大浦美奈子氏なども「もの」について興味ぶかい見解を発表せられたことがある。[11] この方面にも次第につよい照明が加えられつつあるのはよろこばしいことといわねばならない。「あはれ」についても多くの労作がつまれて来ており、わたくし自身も別稿での詳論を期しているが、本稿では、武田氏の所説の中枢ともいえる、「もののあはれ」には「知る」と結びつくものと、結びつかないものとの二の用法があるとする点に焦点をしぼってすこしく考えてみたいと思う。「もののあはれを知る」が情趣情調等に対する美的態度でないとされる武田氏の説は、今井・大久保両氏の疑われているごとく、やはり従えないのではなかろうか。武田氏のあげておられる諸例のうちでも（以下、対校源氏物語新釈本により、アラビヤ数字は巻数を、漢数字は頁数を示す）、

（一）事がなかになのめなるまじき人の後見の方は、物のあはれ知りすぐし、はかなき序のなさけあり、をかしきに進める方、なくてもよかるべしと見えたるに……（帚木1四三）

（二）女ばかり身をもてなす様の所せうあはれなるべきものはなし。物のあはれもをかしき事をも見知らぬさまに引入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはえ〳〵しさも、常なき世のつれ〳〵をも慰むべきぞは、（夕霧4二六五）

などは、自然の情趣を解することも含まれていないとは断ぜられないであろうし、（二）のごとく「常なき世のつれ〳〵をも慰める」とあることなども注意さるべきであろう。また、

（三）それももののあはれ知りて、いとをかしき人なりけり。（大和物語有朋堂文庫本一五一）

にしても、情趣性や感傷性を含んでいるものとみるべきもののごとく、さらに、

（四）かぢとりもののあはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば、早くいなむとて（土佐日記有朋堂文庫本四）

にしても情趣を解する美的態度を含まぬとはいえないであろう。以上（一）―（四）の各例について大久保氏は疑問をもたれたわけであるが、氏もいわれるごとく、人生を情趣化しようとする美的態度に関連をもつ用例もみとめられるとすべきではなかろうか。

（五）「御琴の音……え承らぬこそ口惜しうはむべれ」と聞ゆれば、「物のあはれ知る人こそはあなれ……。」（末摘花1二三四河）

右は河内本の例であって、同所青表紙本には「物のあはれ知る人こそはあなれ』が『聞き知る人こそあなれ」と見え、たしかなよりどころとはしにくいと武田氏はいわれるのであるが、河内本のばあい、音楽の情趣を解する美的態度ととれるところであって、参考とせられてよい例といえるであろう。また、

（六）すべて女の物づつみせず、心のままに、物のあはれ・も知り（を）がほつくり、をかしき事をも見知らむなむ・……（過ぐさざらむ）（胡蝶3三本以下同〇）

などにしても、情趣や風情につらなるものをもうけとれるのではなかろうか。いったい「知る」の語は、知的な活動が中心をなし、知的理解の加っていることは争えないが、必ずしも合理的な認識を意味せず、感覚や知覚をも含めていう語らしく、むしろ今日の感ずるに近いところがあるようである。こうした「知る」と結びついた「もののあはれ」から、情趣情調の面をきりはなしてしまうことは果して正しいものといえるであろうか。「もののあはれ」のばあいではないが、

（七）深き夜の哀を知るも入る月のおぼろげならぬ契とぞ思ふ（花宴1三一二）

（八）女御は、秋のあはれを知りがほにいらへけるもくやしう恥かしと、（薄雲2二六六）

（九）山里のあはれ知らるる声々にとり集めたる朝ぼらけかな（総角5一〇三）

（一〇）山里の秋の夜深きあはれをも物思ふ人は思ひこそ知れ（手習6二七四）

（一一）折からや哀も知らむ梅の花只かばかりに移りしもせじ（竹河4三九六）

等の「あはれ知る」が、自然の情趣情調に関するものであることは明らかといわねばならない。

（一二）なべての世の事につけても、はかなくものをいひかはし、時々によせて、哀をも知り、故をも過ぐさず、よそながらの陸びかはしつべき人は、斎宮とこの君とこそは残りありつるを、（若菜下4一〇一）

のごとく、「故」などと連関してあらわれる「哀知る」は情趣の世界のものとも解しうるのではなかろうか。「故」については別稿を見られたい。[12] そう思って見てくると、

（一三）「哀知る心は人におくれねど数ならぬ身に消えつつぞ経るかへたらば」と、故ある紙に書きたり。物あはれなる夕暮、しめやかなる程を、いとよく推し量りていひたるも憎からず。

（蜻蛉6二〇三）

にしても、単に同情あるいは人情といった意のみでなく、「故」ある紙に而も折からをよくわきまえて歌を書きやるふうな態度と無縁なのではあるまい。

（一四）誠は。この空を見給へ。いかでかこれを知らずがほにては明かさむとよ。艶なる人真似にはあらで、いとど明かしがたくなりゆく夜な夜なの寝覚には、この世後の世まで思ひやられてあはれなる（宿木5二五七）

この（一四）のばあい、「あはれ知る」と用いられているのではないけれども、文意からすれば、ここの「知らずがほに」は「あはれ」な月夜を「知らずがほに」となるところである。自然の情趣を解する「あはれ知る」のばあいと見なしうるであろう。以上（七）―（一四）の諸例を見きたれば、「あはれ知る」が情趣情調に対する美的態度をあらわし、人生に対する態度とのみはいえぬことを知るであろう。

（一五）日暮れかかるほどに、気色ばかりうちしぐれて、空の気色さへ見知りがほなるに、さるいみじき姿に、菊のいろ〳〵移ろひえならぬをかざして、今日は又なき手を尽したる、入綾の程そぞろ寒く、この世の事とも覚えず。もの見知るまじきしもびとなどの、このもと岩がくれ、山の木の葉に埋もれたるさへ、すこし物の心知るは涙落しけり。（紅葉賀1二七七湖）

右は「物の心知る」の例であるが、宣長も「物の心を知るは即ち物のあはれを知る也」といっていること周知のことがらであり、その「物の心知る」にもじつはこのように美的態度に連るものが見えるのである。この（一五）の文をうけて、「これらに面白さの尽きにければ云々」と見えている。このばあい、「面白き」対象のわかるのが「物の心知る」なのであって、美的意味と無縁とはなしえぬであろう。「面白し」については別稿を参照されたい。[13] 同じく、

（一六）それにつけても世の譏りのみ多かれど、この御子の、およすげもておはする御かたち心ばへ、ありがたく珍らしきまで見え給ふを、えそねみあへ給はず、物の心知り給ふ人は、「かかる人も世にいでおはするものなりけり」と、あさましきまで目をおどろかし給ふ。（桐壺1四）

のばあいの「物の心知り」にしても、単に物の道理をわきまえるとか、人情を解するというのみにとどまらない、美に感ずる意味性といったものをもうけとってよいのではなかろうか。

（一七）物のなさけ知らぬ山賤も、花の蔭にはなほやすらはまほしきにや（夕顔1一一九）

に見える「物のなさけ知」るといういい方も参考せられてよいであろう。宣長は「もののあはれ」を「なさけ」と結びつけて説いているが、この点はもっと重視せられるべきであろう。「なさけ」については別稿を期することとして、「物のあはれ知る」の、情趣情調等美的なものに関連する用法の存在をうらづける助証資料としてこれをもあげておく。また、

（一八）おほやけの勘事なる人は、心にまかせてこの世のあぢはひをだに知る事難うこそあなれ。面白き家居して、（須磨2四三）

のごとき、「この世のあぢはひ」を「知る」といういい方も注意さるべきであろう。

（一九）このついでに御方々の合せ給ふども、おの〳〵御使して、「この夕暮のしめりに試みむ」と聞え給へれば、さま〴〵をか

しうしなして奉れ給へり。「これ分かせ給へ。誰にか見せむ」と聞え給ひて、御火取ども召して試みさせ給ふ。「知る人にもあらずや」と卑下し給へど、（梅枝3二二五）

（二〇）この東のつまに、軒近き紅梅の、いと面白く匂ひたるを見給ひて、「お前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿の宮うちにおはすなり。一枝折りてまゐれ。知る人ぞ知る」とて、

（紅梅4三七四）

これら（一九）（二〇）の「知る人」はもちろん古今集春上の「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」から来ているが、「知る」だけで情趣情調を解する美的態度に連るものをにないえているのである。「もののあはれ」にこうした「知る」が結びつくことによって、「もののあはれ」から自然の情趣を意味するばあいがみとめられなくなるということはうなづけないことである。以上、（一）―（二〇）の諸例によりつつ考えきたったことどもよりすれば、平安時代、「もののあはれ知る」をもって自然の情趣に用いた例は見つからぬとするごとき説はまずみとめられないといえるようであり、やはり情趣・情調等美的なものに関連し、美的態度を含むとするのがおだやかであろうと考えられるのである。

三

宣長が「もののあはれを知る」ことを主張する時、情趣や情調を解する美的態度が重要な側面として含まれていたし、[14]「物のあはれ」の外に、「物のあはれしる」というような何か特別な観念を主張する意向があるように考えるのは宣長説の正しい理解ではないであろう。[15]また、宣長の用法は平安時代に用いられた「もののあはれを知る」の用法を逸脱したものではなかったのである。而も宣長のばあい、平安時代の用法に基づきつつ、文芸論上の概念を表わす用法として用いられているものなることを見忘れてはならない。宣長は「もののあはれ」によって広く文学の本質をとこうとしたのである。而もそれがいわれるごとく、もともと歌論からの発展と見なしうべきものであり、近世期の社会的規範に対する宣長の感性的人間自覚と結びついた歌学構造に固有の論理であった以上は、そのようなものとして究明せられることを要するであろう。それがそのまま構造を異にする物語の解明にどこまで役立ちうるものかどうか、たしかに問題といわなければならない。かれのいう「もののあはれ」で源氏物語がおおいつくされるものではないといい去る前に、かれの「もののあはれ」論にはまだまだ究明さるべき多くのものがのこされているのではなかろうか。われわれは虚心にねばりづよくこれが究明に従わなければならないであろう。そこからこそ、いわれるところの「もののあはれ」論の克服なるものも真の方途をえてくるのではなかろうか。「もののあはれ」論についてはもっと吟味検討が加えられてゆかねばならぬ。そういう意味で武田氏の論は注目すべき問題提起であったと評しうるであろう。しかし、宣長の「もののあはれ」説の真意が人情を解するにあるとし、これこそが平安時代の「もののあはれを知る」という精神に真につらなるのであり、未来をはらむものとしてわれわれの承けつぐべきものであるとされることには従いかねるのである。宣長のばあい、大西克礼博士の五段階説[16]によれば、その第三段階即ち心理的見地において考えられた美意識ないし美的体験一般の意味までは把握していたようで、かれの「もののあはれ」論は源氏物語自体における「あはれ」が依

ってたつ真に美的な高次の段階にはとどいていなかったと見られる。それはとにかく、武田氏のごとく、「もののあはれを知る」というのは人生に対する柔軟繊細で広やかな理解であり愛であり共感であって、上昇線を辿りつつある階級の生きる社会環境に生れたものであり、文化の爛熟につれて、人間生活を美的享楽の対象とし、これを情趣情調として享楽しようとするに至るとされ、情趣情調等の美的なものをもって頽廃期のものと規定し、むしろ克服すべき弱点とされることには、ただちには従いえないものを感ずるのである。その論の立て方には飛躍があり、すこしく機械的にすぎるうらみをのこすように思われるのである。それこそ、人情を解する意のそれにおとらず、情調としての「物のあはれ」の美しさもまた「未開の社会や、野生的な人からは望めない。高い文化の所産なのである。」（武田氏論文五六頁）といえるであろう。このような面をも含むところの「もののあはれ」の中に、未来をはらむものとしての真に承けつぐべきものを、いま一度たしかめなおすということがなされてよいのではあるまいか。宣長の論はそれとして究められてゆかなければならない。ひるがえってまた、源氏物語自体の中に、「もの」や「あはれ」や「もののあはれ」やといったもの、あるいはさらに、これらに関連することばとして、「なさけ」や「こころ」や「をかし」や「おもしろし」や等々といったものへの追究がなされなければならない。と同時に、平安時代の文学精神の中で「もののあはれ」のもつ意味が広い全体的立場から考えられてゆかねばならぬこと言を俟たないところであろう。宣長の「もののあはれ」論が中・近世に横行した儒仏観的源語論を排したことは、まさに不朽の功績と評さるべきであろうが、淵江文也氏の傾聴すべき論⑰もあらわれているごとく、源語作者自身は問題の解決にあたって、経・史の典籍や仏説論義に多くの資を仰いでいることもまた否定できないところであろう。ともあれ、王朝の歴史社会に生きた作者の創作を支える内的論理に立って源語を見るまなこは宣長によってその端緒をさぐりつけられたとの感がふかい。しかし、それはやはり端緒がさぐりつけられたというのであって、われわれとしては宣長説をくぐりぬけた地点でさらに研究をおしすすめなくてはならない。源氏物語の本質をつよくせめつづけつつ、儒仏の教え等の、この世界での正しい位置づけも慎重に見さだめられてゆかねばならないし、「もののあはれ」にしても作品の到達点において闡明せられ、それよりしてこそ、未来をはらむものとしての真に承けつぐべきものが確認せられきたるというのでなくてはならないのではなかろうか。以上をもってひとまず本稿をとじようと思う。考えあやまっている点、至らないところについてはひたすら御批正をねがってやまない。また先学に対して非礼にわたったところは幾重にもおわび申し上げる。

（三三・一・七稿、同一・一五補）

註

① 武田宗俊氏「所謂『もののあわれ』に就いて」「文学」昭和二十七年十一月。

② 今井源衛氏「戦後に於ける源氏物語研究の動向」「文学」昭和二十九年二月。

③ 大久保正氏「もののあわれ論」東京大学出版会刊日本文学講座Ⅳ「日本の小説Ⅰ」所収。

④ 小松茂人氏「宣長の『物のあはれ』について」「文芸研究」

第二十二集。

⑤ 井手恒雄氏「宣長の『もののあはれ』―武田宗俊氏の提唱をめぐって―」「文芸と思想」第九号。
同「『もののあはれ』の伝統と平家物語」同誌第十号。

⑥ 犬塚旦「美意識の展開と『もののあはれ』について」(要旨)「文学史研究」第三号。

⑦ 高木市之助博士「もののあはれの課題」東京大学源氏物語研究会編「源氏物語講座下巻」。

⑧ 和辻哲郎博士「『もののあはれ』について」「日本精神史研究」所収。

⑨ 西下経一博士「源氏物語の『もの』」「国語と国文学」第三十一巻第一号。

⑩ 高森亜美氏「源氏物語『もの』考―その構成と内容―」「女子大国文」第七号。

⑪ 大浦美奈子氏「『もの』および『こと』という語のもつ形式性および作用性」(要旨)「文学史研究」第八号。

⑫ 犬塚旦「『ゆゑ』と『よし』」「平安文学研究」第十八輯。

⑬ 同「平安朝文学における『おもしろし』―宇津保・源氏の用例を主に―」「国語国文」第二十六巻第九号。

⑭ 大久保氏前記論文。

⑮ 小松氏前記論文。

⑯ 大西克礼博士「あはれについて」「幽玄とあはれ」所収。

⑰ 淵江文也氏「蛍巻物語談義注試論―宣長『物のあはれ』説への一修正―」「商大論集」第十九号。

(附記) 犬塚氏は昨夏物故せられ、右は氏の遺稿に当る。執筆されたのはすでに一年半以前に属するが、この点読者の御諒承をおねがいし、氏の御冥福を祈り申上げる。